特別寄稿

押川方義墓畔の人々を語る

（その5）

花輪庄三郎

前田次郎

穎才を惜しまれつつ若くして逝ける英語教師

前田次郎の墓は、押川方義墓域中、向って右寄りの背後にある。石材は当地産のもので、台石は自然石、標石は高さ72センチ、横35センチの四角の切石。正面に「前田次郎の墓」、背面に「明治六年二月六日生」及び「明治四十年五月十二日永眠」と二行に記されただけの簡素な墓である。

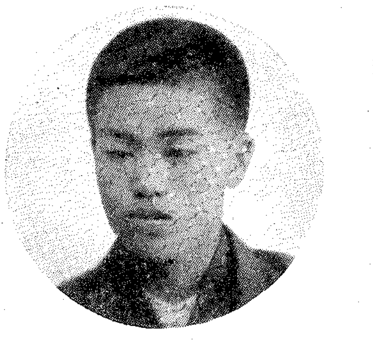
前田次郎は、山形県の温泉地、上の山の近在、西郷村字高松に生れた。前田小三郎の長男である。村の小学校から、上の山町の明新学校に入学した。明新学校というのは、昔は上の山藩の藩校であって明新舘と称したが明治になってから、その後をついで明新学校と改称した初等中学校二、三年程度の私立学校であった。

明治20年、上の山から三里ほどへだたった山形に、押川方義を校長とする山形英語学校なるものが設立され、仙台の東北学院から押川方義をはじめ、モール、シュネーダー等の教師が講師として迎えられるようになると、東北学院（当時は仙台神学校）の名が、山形県側にも急に知られるようになった。

そんな関係から、明新学校から仙台神学校、つづいて東北学院に転学してくる生徒が明治の終り頃まで続いている。

前田次郎もその一人で、明治20年15才で明新学校を卒業したが、直ちに同校の教員となり、ついで22年17才で仙台神学校に入学した。この頃、モール師から洗礼をうけたといわれるが、多分山形でのことであろう。

27年東北学院本科卒業、31年同神学部卒業、窮乏な学生生活だったらしいが、前にも記したような秀才であった。卒業後、直ちに大河原において伝道に従事したが34年東北学院教授に迎えられた。時に28才である。学院では、英語・作文・歴史などの学科を担当したところにも多才多能の人だったことがうかがわれる。有名なゲルハード教授のオーラル・メソッド教授法も前田次郎との協力のもとに案出されたものであった。39年、40年頃の東北文学誌上に、さかんに和英両様の文章、詩歌が載っているが、その文才がしのばれる。



前田次郎

前田次郎の墓

「東北教会時報」第72号に、その莫逆（ばくぎゃく）の友だった五十嵐正がものした「前田次郎小伝」を見ると「君幼にして聡穎、夙に神童の称あり、今日に至るまで其名郷党の間に籍甚たり。また早くより基督教を信じモール師より洗礼を領す。父母親戚大いにこれを患い、其志を飜さしめんとせしも、君毅然その志を改めず、ために父母親戚及び朋輩を絶つに至れり。君また伝道の志望甚だ熾にして、その神学校に入れるが如きも、実はその内心に囁ける神の召喚に副わんと欲せしがためのみ。（中略）君性情熱に富み、談論風発、動もすれば好悪ともに偏するの傾向にあり、猥りに人に親まず。然れども、友情頗る濃厚、婦人の間にも交友頗る多し。また文芸の趣味深く、文章に堪能にして、しばしば新聞雑誌等に英和両文を公にす。云々」と。

また「君固と蒲柳の質、学生時代よりしばしば肺患に罹る。三十七年春休職して鎌倉及び八丈島等に療養をつとむ。三十九年四月仙台に帰る。同年十一月十八日突然咯血し、宮城病院に入り爾来療養につとむること約半年。四十年五月十二日、容態すぐれず、急性腹膜炎を併発し、午後六時三十分溘焉永き眠につく。年を享くる三十有五」と。

なお、「東北教会時報」の創刊、学院同窓会の組織及び会則起草等にも寄与するところ大なるものがあったといわれる。

香味ちか子

仙台神学校創設に献げた「寡婦のレプタ」

香味ちか子の墓は、押川方義の墓の東南、約100メートルの処にある。台石は三影石の四角の切石を二段に重ね、標石は黒色四角の油石、縦51センチ、横37センチ、向う高に寝せてある。表面に「香味ちか子の墓」、側面に「大正三年五月三十日永眠、享年七十六才」と刻んである。（注、この年数は満数でかぞえている。）

ちか子は、天保9年10月3日、仙台市木町通に生れた。本姓は今野氏。文久元年24才の時香味三四郎のもとに嫁し香味氏を称した。三四郎には、前妻との間に一子、良平（当時9才）がいて、ちか子は三四郎のためには後妻であり、良平のためには継母であった。住居は、今の学院大の正門の向側の辺、つまり南六軒丁にあったが、後、田町に移り、今の紅久家の門前の向側の辺に住んだ。

明治9年、ちか子29才の時、良人三四郎を喪い寡婦となったが、押川方義の指導により基督教に入り、稀にみる謙虚な篤信家としてその生涯をつらぬいた。その中でも仙台神学校（東北学院の前身）創設の際、おのが老後に備えて、ひそかに蓄えた古銀十二枚を、創設資金に献げたことが美談となって伝えられた。押川・ホーイの両師は、「寡婦のレプタ」（マルコによる福音書12章42節）ともいうべきこの献金に一層の勇気を振いおこし、また内外関係者の義心を動かし、神学校建設の大きな原動力となったのであった。

大正3年6月、すなわち、ちか子永眠の翌月発行の「東北教会時報」誌上に載った、ファスト博士、吉田亀太郎等の「故香味ちか子女史」を弔う文章を見ると、その面影を髣髴させるものがある。

「明治九年、良人三四郎を喪い寡婦となる。明治十七年七月、たまたま押川方義氏来訪、基督教の研究をすすめらる。刀自之を厭い、身の無学にして文字なきこと、其他の辞柄を設けて之を謝絶す。而も押川氏は、伝道婦水谷てつ姉を送りて伝道せしむ。（注、水谷てつは、もと、パームが新潟時代にコックとして横浜から雇入れた婦人であるが、押川が仙台に進出した後、その許で伝道婦として働いた。）水谷姉は、当時文倉通なる押川氏宅に寄遇中なりしが、毎週一回、必ず遠く六軒丁の香味家を訪うて道を説き、寒暑晴雨の別なく曽て怠ることなし。（中略）十八年一月二十五日、遂に意を決して押川教師より洗礼を受く。」

「当時、基督教に対する反対なお甚しく、同姉のために頗る烈しき迫害をうけられた。其家庭に於て祈祷の自由を得ざりしを以て、しばしば広瀬河畔に至りて独り神に祈られたということである。

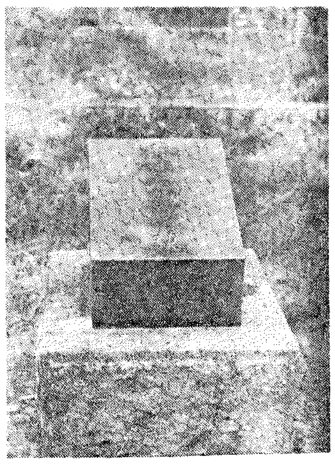
「姉は篤信の婦人にして、常に主の事業に対し深き興味を懐きいたれば、其信仰生活は実に尋常のものではなかった。仙台に神学校の創設せらるるや、姉は之に多大の義心を感じ、かねて老後の備えにとて蓄え置きたる金子二両をその創設費に寄贈された。これ所謂「寡婦のレプタ」というべく、然も頗る有力なレプタというべく、仙台並びに米国の友人は永久に忘れ得ない美談である。云々」

「姉の葬儀は、大正三年六月二日東二番丁仙台日本基督教会に於て執行せられ、萩原牧師の説教に次ぎ、出村博士は東北学院を代表して、モール博士はリフォームド・ミッションを代表して各弔辞を述べらる。会葬者は堂にあふるるばかりにて、中にも東北学院、及び宮城女学校生徒の参列せるをみた。特に学院理事員諸氏は堂内に於いて、霊柩昇移の労をとられた。云々」。

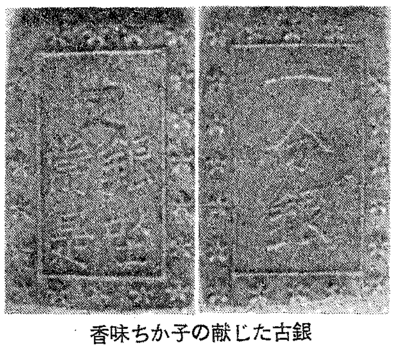
つまり学院としては、準校葬の礼をつくしたわけである。

なお、前記「寡婦のレプタ」に譬えられた当時の古銀十二枚は、米国のミッション・ボードに送られ、今でも巾着に入れたまま、現存しているとのことである。

香味ちか子



香味ちか子の墓



香味ちか子の献じた古銀

募金報告

歳末まで一億円に

もうひとふんばり

東北学院大学後援会の47年度新任役員会は10月30日（月）仙台ホテルで開催、会長古谷敬二氏、副会長小松寿右エ門・首藤英二両氏の外、本山軍蔵、成瀬謙三、新島伴治、和泉学、森民弥、金田一政一、都築智慧蔵、高橋金蔵、樋口門次郎、森尚、米城正三郎、伊藤清次、牧野広の各理事ならびに千坂重太郎監事、大学側から小田学長、小林文学部長、佐藤法学部長以下が出席、諸報告の後、東北学院創立八十五周年記念事業募金についても、古谷会長は挨拶の中で「物心両面についてご協力を申上げなければならない。」と述べられ、振興相互銀行としてのご寄付金三百万円（別に振興相互銀行TG会としては会員二百名で、総額ほぼ金壱百万円程度のご寄付を同窓生がボーナス時期に集められるという。）を翌日、申出られた。その上、関係各方面に直接乃至は電話でこまごまとお口添えを下さっているのは全く感謝にたえない。

東北学院 中学 高等学校 奨学会（会長大石栄一氏）では11月2日（木）総会を、東北学院榴ケ岡高等学校奨学会（会長佐藤一雄氏）では11月11日（土）役員会を開催、募金についての打合せも行なった。11月15日現在における募金状況はお申込みで、法人39件金二一、五一〇、〇〇〇円、個人寄付は1、457件で金五〇、五〇二、一七四円ですから合計して1、496件、金額にして金七二、〇一二、一七四円に達した。個人寄付1、457件の内訳を見るとご父兄762件、同窓513件、教職員173件、一般10件となっている。

なお募金について色々お問合せを受けるので、問答形式で、一括お答をいたしたい。

問『募金趣意書を貰うが、とじ込んであるのと、はさんである趣意書と二通りがあるのはどういうことか、ちょっと分らない。』

答『実は募金趣意書は大蔵大臣に免税の申請をした「教育研究基金・育英奨学基金募集趣意書」と文部大臣に提出申請をした「記念事業資金募集趣意書」の二つがあります。どちらもとじ込んだ趣意書で、免税期間が承認の日から法人では一ケ年間、個人寄付では二ケ年間となっています。ご参考までに添付しましたもう一枚の細長い紙の方は創立八十五周年から五ケ年間の綜合計画といいましょうか、全体のプランをお目にかけたものです。随って免税の対称にならない幼稚園舎改築とか同窓会館とかは大蔵省、文部省提出書類には入っておりません。（校費で支弁することは勿論自由です。）』

問『東北学院は5年目ごとに募金するのではありませんか。創立九十周年になったら又寄付があるのでしょう。』

答『前回の募金は創立七十五周年記念でしたから、5年目毎でなく10年目といえるでしょう。然し前回は昭和40年度末で締切りましたから、前回の最後の頃ご寄付下さった方にはすぐ又、寄付が来たという感じになられたことと思います。』

問『創立七十五周年記念募金の際の決算報告はしてあるか。』

答『昭和42年6月25日発行の東北学院時報第211号第3頁で募金実行委員長阿部欣二先生のお名前で、ご挨拶と募金実績報告書が載っております。東北学院時報の紙上だけのようでしたからご覧になっていない方々には不満と誤解が残っておるようでございます。今回の創立八十五周年記念事業は向後5ケ年継続の事業でございますから、昭和51年の創立九十周年の式典まで続きます。』

問『寄付は最低でどの位でしょうか。』

答『お宅に東北学院時報が届いておりましょうか。募金報告が毎号載っておりますからご覧下さって応分のご寄付をお願いいたし度う存じます。東北学院にかつて南町にあったジョン・オールト記念館やルドルフ・エフ・ケルカー記念図書館、東二番丁にあって戦災で焼失したハウスキーパー記念社交館があったことをご存知でしょうか。そして今なお東北学院大学にミス・エラ・エー・ラーハウザー記念礼拝堂があります。そろそろ創立九十年になりますので、日本人の同窓生の中から建物を一つ寄付する位の人物が現れないものでしょうか。東北学院高等学校には卒業式当日、英語の優秀な生徒に授与する同窓生からの奨学金がありますし、月浦利雄理事長のもとには以前から匿名で奇篤な奨学金がいくつか寄せられています。前号でご紹介をした明治38年普通科、同43年神学科ご卒業で米国イリノイ州で牧師をしておられた故鈴木吉助氏のご遺族かず子さんのお手紙に依れば金百万円は農村出身の学生・生徒の奨学金基金にして欲しいというご希望でございます。キリスト教主義学校東北学院における募金と寄付はいつも暖かい祈りを籠めた献金であると信じて感謝をもって頂戴しております。私学である限り、母校の存続する限り、ありがたい献金は永久に続くことと信じております。』

（飯島記）

お詫びとご報告

9月28日付東北学院時報第275号で福島県相双地区の大学関係のご父兄212名のご寄付金三十万三千円也をご紹介したあとで、それぞれ金二千円宛をご寄付下さった鈴木俊雄様、広畑忠一様、門間彦蔵様、松崎研次様四名のお名前を転記の際のミスから洩しましたことを深くお詫びいたします。

又、仙台市若林一丁目5―27、産婦人科吉田仁三先生宅から金二万円也を寄付したのに東北学院時報第275号（9月28日発行）には金二、〇〇〇円と出ているとのご連絡がありましたので、調査をして見ました結果、同名異人の間違いで、金二、〇〇〇円也は山形県在住の吉田仁三様で、仙台市若林一丁目産婦人科吉田仁三先生のご寄付は6月28日発行東北学院時報第272号「募金報告」の中で、金二万円也7口の一つとしてご報告を申上げております。今後、同名の方がおられたと気づきました時はご住所を略記してお間違いのないようにいたします。

第17回寄付者ご芳名（敬称略）

金三・〇〇〇・〇〇〇円（2口）
七十七銀行（第二回分）、振興相互銀行

金三〇〇・〇〇〇円（2口）
合資会社竹内金物店、宮城県庁TG会

金一五〇・〇〇〇円
小笠原政敏

金一〇〇・〇〇〇円（9口）
高橋等、小林惟康、大童典夫、須知（康文・康武・完司）、岡山好作、松尾（孝・信仁）、高橋永、高橋せん、匿名氏（戦前の同窓生）

金五〇・〇〇〇円（2口）
竹内源一郎、金ケ崎（士朗・仲二・仲也）

金三〇・〇〇〇円（4口）
小島勇馬、三田地時郎、永井昇

金二一・〇〇〇円
細谷昌弘

金二〇・〇〇〇円（2口）
仙台青年会議所中高TG会、東京時計製造KKTG会（第八・九回）、高田種夫

金一二・〇〇〇円
山田寛治

金一〇・〇〇〇円（25口）
山川潔、郡山寅雄、桜井昌雄、瀬戸豊蔵、宍田康、高田恵雄、佐谷和美、大柳雄彦、寺沢健、高橋勝義、竹内源二郎、高橋和雄、大友幸治、勝倉海一郎、佐々木龍雄、井上通男、青木虎志、阿部豊吉、大宮養治、菊池唯三、堀江昇、堀江真理枝、和泉学、（第二回）青砥朝衛、熊谷直人

金五・〇〇〇円（10口）
斎藤靖、千葉俊太郎、金子定雄、佐山作太郎、細野則雄、佐々木昭二、有賀彊、北島淳男、中沢敏夫、上野憲久

金三・〇〇〇円（11口）
小野寺佐内、山内正一、伊藤由雄、小幡忠夫、村主英治、高橋清美、渋谷正蔵、桜田達郎、坪田耕一、野口一温、永井忠雄

金二・〇〇〇円（8口）
青山尚、諸岡敏治、高橋義哉、角力山良三郎、山口実、沼田立次、松浦康夫、沼田哲夫

金一・〇〇〇円（5口）
茂泉敏雄、吉田寿治郎、大友三郎、三浦範信、庄司正夫